

思春期なアダム4

聖域の崩壊

さかき傘
挿絵／天海雪乃



立ち読み版

じゆうに
地遊尼エンジュ

睦月を護衛する天使少女。身の丈ほどもある大剣を操る。



ふじたむつき
藤田睦月

普通の少年だが、右目に女性を支配する“蛇眼”の力を秘めており、現在はエンジュたちと同居し、保護されている。



いぶくさ
伊部草マキナ

秘密組織「FeTUS」の一員。同級生、睦月を監視するも彼へ惹かれていき…。





ミスA

「FeTUS」幹部メンバーの一人。中世以前から生きていたと思われる、年齢不詳の幼女。



とわ 里輪ルシア

蛇眼を狙う悪魔の美少年。睦月に懐きすぎて、友人以上の関係に？



かつ え すばる 勝江昂

睦月の担任の女教師だが、正体は「FeTUS」のエージェント、ミスC。



く り から さ や 九里空沙耶

エンジュに一方的な恋心(?)を抱く、睦月の同級生の明るい少女。

じ ゅ う に 地遊尼ミカ

睦月とエンジュ、二人の保護者となる大人っぽい美人の先輩天使。

だい ま ま こと 大間真

学園の大柄な女体育教師だが、その正体は「FeTUS」のメンバー、ミスD。

ラファ

エンジュが「兄さん」と慕う天使の青年で、ミカの同僚。

STORY

“蛇眼”の力に目覚めた少年、睦月。世界のあらゆる女性を発情させる力を右目に秘めた彼は、天使、悪魔、そして人間側の秘密組織「FeTUS」に監視される生活を送っていた。普段は天使エンジュとミカに護衛される睦月だが、彼女たちと敵対する悪魔の美少年ルシアや、「FeTUS」の少女マキナとも心を通わせ、彼等が争わずに済む方法を模索す

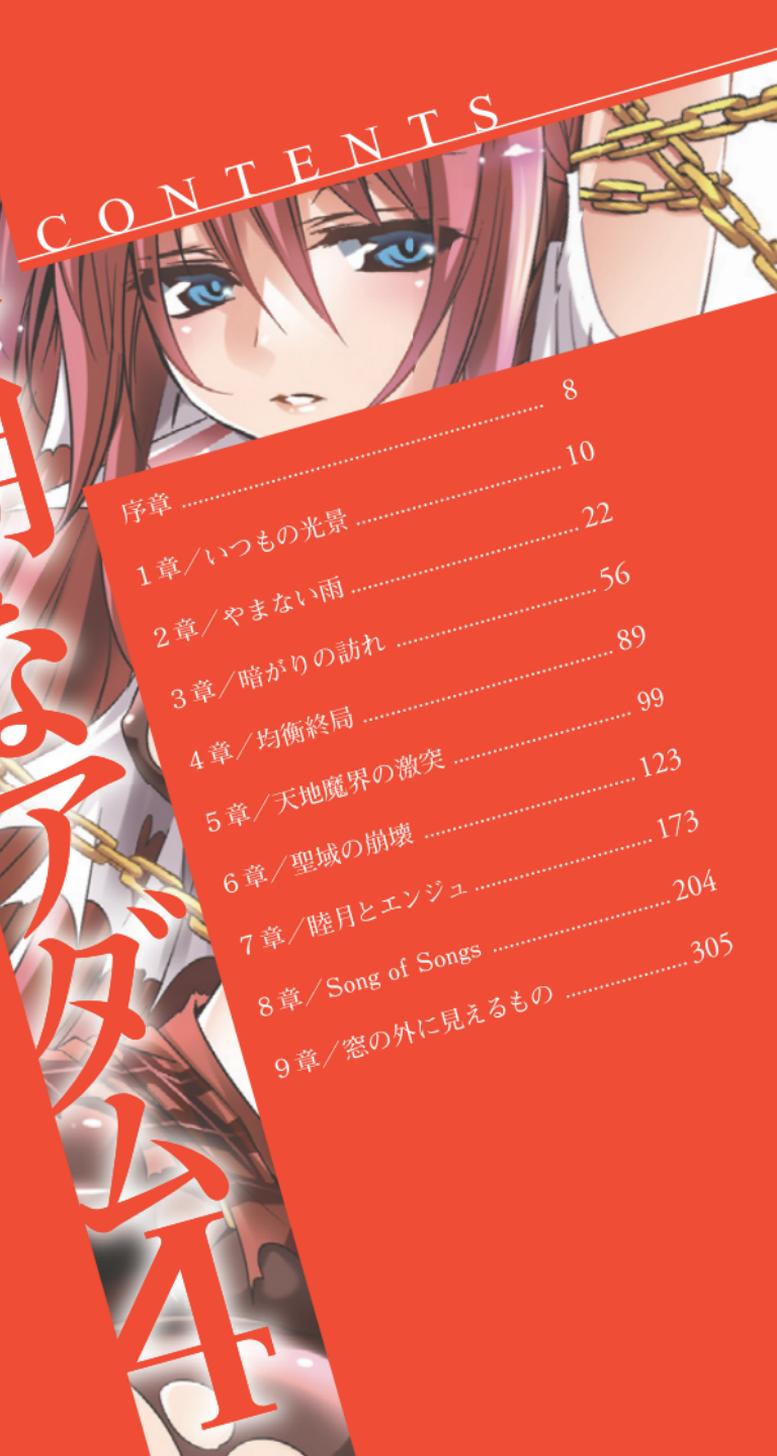
る。そこに襲来する「FeTUS」のエージェント、ミスCこと“黒猫”。瀕死の重傷を負わされた睦月のため、エンジュ、マキナ、ルシアは協力し、彼を救うとともにミスCを退けるのだった。そして、蛇眼とエッチの力でミスCを骨抜きにする睦月。平穏を取り戻す学園生活だが、その陰で、エンジュを中心にした天使の計画が動き始めていた…。

これまでのあらすじ

思春期なアダム

CONTENTS

序章	8
1章/いつもの光景	10
2章/やまない雨	22
3章/暗がりの訪れ	56
4章/均衡終局	89
5章/天地魔界の激突	99
6章/聖域の崩壊	123
7章/睦月とエンジュ	173
8章/Song of Songs	204
9章/窓の外に見えるもの	305



拘束を命じたルシアより、離れるよう命じた睦月の意志に従っている。

驚きと、わずかな恐怖に、マキナは眉をひそめる。

「こっち来て」

だがそれも長くは続かなかった。手招きされると、すぐにその表情は従順な所有物のものとなり、近づいていくしかない。

彼は突き立てたものでルシアを泣かせながら、所有物の腰を抱き、

「う……ん」

抱きしめながら膚はだえを優しく愛撫していった。染みの残ったシャツが落ち、首に残ったりボンが乳房に貼りつく。

さんざんルシアとの熱い仲を見せられた身体は、これまでよりもっと感度をあげていた。身も心も睦月の思うがまま。視線を受ければ、命じられるまでもなく彼の望むことを察して動き、

「あ……っうあ」

仰向けになつたルシアの頭側に回って、華奢な両足を引き寄せた。

意識の飛びかかっている魔少年は、がっちり固定されたあとで、V字開脚にされたと気づく。眉をひそめた。

「む、睦月くん……このカッコ、恥ずかしい」

「そう？ でもココは恥ずかしいの嬉しそうだよ」

あけっぴろげにされた両足の付け根で、所在なげに揺れている付属物をつまむ睦月。

「ちよつと大きいクリトリスみたいだね。……ははっ、弄つてるとお尻の穴まで反応するよ。中身がねつとりキスしてくる」

「あっ♥ んんんっ♥ だめえ、クリっ、みたいに、敏感なんだから。そんな乱暴にこしゆらないでえ♥」

もちろんそのあいだも、結合部は揺さぶり続けている。

すでに排泄口というより性具に近い淫らさになった少年の柔肛だが、初物には変わりなく、とくに入り口付近は痛いくらいにペニスに食いついている。

キュルキュル渦を巻くように吸着してくる腸壁の具合も気持ちいいが、キツすぎるくらいに収縮には、オスの攻撃性を煽るものがあつた。

「そらっ、そらっそらっそらっ」

「んはんっ♥ はっ、はひっ、あへえんっ♥ そんなにや、ケツ穴ずぼずぼしちやらめええ。ちんぽに響くの、ちんぽにくるのおっ♥ もおお……ボクもおすぐにイッちやうよお。ちんぽミルクでちやうう♥」

ガツガツと激しく突きを送られて、息も絶え絶えといった様子のルシア。

「あれ、もうイキそう？」

「うんっ、うんっ。出ちゃうの。ちんぼ、ちんぼばーんてなるのお♥」

「……フフっ、まだダメ」

背肛快樂に被虐の鳴咽をあげる彼に呼応するよう、睦月はサディスティックに微笑み、びんびん跳ねる小さな肉器の根元を掴んだ。

「僕が出すまで、ルシア君も出しちゃダメだよ。一緒にイこう？」

「えう……。そ、そんなあ、でもボク、ボクもう」

「嫌ならしいよ。抜いちやうから」

腰を引いていき、野太く張った雁首の部分を入り口のリング筋にあてる。

「うく……。い、いじわる♥ ボク、ボクもうアナルマゾなのに。おちんぼに逆らえなくなつてるのにい♥」

ぐりぐりと括約筋を内側から刺激され、ルシアは涙目になりつつも、従順に首を縦にふつた。

よろしいと笑い、睦月は余裕綽々よゆうしゃくしゃくに腰を戻す。アナルセックスの経験は少ないが、V字開脚が相手なら、慣れていなくても出し入れしやすいく。

腸壁へ衝撃を送りこむような動物的なものでなく、ぬるーっ、ぬるーっとな腸汁の粘り気を使ってスムーズに出し入れた。

「……♥♥♥ それ……。あはあんそれだめ♥ うんち出てるみたいい、ちんぼっ、ちん

ぼムズムズするよう。せーし出したくなっちゃおう♡」

「あれ、やめたほうがいい？」

「やああつ、やめるのはダメえつ。お尻こんなに、こんなにしたの睦月くんなのに♡ 睦月くんがどスケベな肛門にしたのにい♡ いまさらやめちゃだめええ♡」

少し腰を引けば、ルシアは動きにくい身体で必死にムチムチお尻をせりあげ、追ってこようとする。怒張にへばりついたピンク色の腸壁までが、あとを追って色の濃いアヌス皺からはみ出していた。

「ふふつ、やらしいお尻。見てよ伊部草さん」

同じくバージンだったマキナと比べて、格段のスピードでペニスに慣れた粘膜に、睦月は口端をゆがめながら補佐する少女を見やる。

ぽーつと頬を染めて、睦月のことさら淫靡に律動する下半身を見ていたマキナは、ハツと気づいたよう顔をあげた。

言われる通り身体を四つんばいに倒して、V字に押さえた足の付け根。マシユマロのような玉袋の底部にある、腸汁だけでトロトロぬかるんだ結合部を覗き込んだ。

「あ、わ」

マキナは当然自分のとき見ていないので、性交するアヌスなど初めて見るが、比較対象などなくてもそのいやらしさは一目瞭然だった。

愛くるしい朝顔の蕾のような穴が、見慣れた雄々しいもので貫かれ、中から別色をしたピンクの花弁をはみ出させている。といって痛ましさはなく、蕾そのものはヒクヒク歓喜の蠢きを見せている。

「……っと、この辺かな。ルシア君の弱いトコ」

ぬるるつとあくまでソフトに、巨大な逸物をふるう少年。

「あああああああつ♡　そ、そこおお♡」

尖端部——睦月の持つ、人一倍パンパンに張るクセのある亀頭部が、一番感じるところにあたったのだろう。ルシアが声のオクターブをあげた。

「おっ♡　おっ♡　おっ♡　おっ♡　ほんんん、そえつ、そえしゅごいいい♡　ちんぽつ、ちんぽの中にぐいぐい来りゅううッ♡♡♡　ひんじやううつ、気持ちよしゆぎてひんじやうよおおっ♡♡♡」

「ふふ、この前は指で触っただけですごい反応だったもんね」

釣り針でいう返しに似た、太く張り出した雁首を、アナルGスポット前立腺に引っかけて、ぬたぬたと妖しく揺さぶっていく。

「出りゅううつ、出しゅぎちやううッ♡　ちんぽのうらつかわ、そんな激しくグイグイしないでえ♡　みるくびゅーって、ミルクびゅーってしたくなっちやうよおお♡」

一突きされるごとに、精囊が押されるらしい。もはや魔少年はマシユマ口壘丸をキュン

ドライキラーガズム
キウン反応させて女の絶頂を極め続ける。

「……は♡」

野太いペニスに喜びはしゃいでいるルシアの興奮が伝染したらしい。四つんばいのマキナもまた、先ほど性感帯に作りかえられたばかりの肛門をモジつかせだした。

興奮に任せていた自分のときとちがって、いまの睦月には明らかな余裕がある。そのぶつながつた相手に与える被虐の快感も段違いなのは間違いない。

いまルシアはどれだけの快楽にさらされているのか……。羨望まじりに熱っぽくため息をつく少女。

「藤田……君、……ン」

甘ったるく下腹部にかかる吐息に、要望を察し、睦月はそんな彼女の頬へ手をやった。顔をあげるマキナ。唇同士が、すっかり慣れた様子で重なる。

「んく……っぱう、藤田くん、ふじた……くん」

「っは……。伊部草さんの口、美味しいよ」

溜まった唾液をたっぷり使って、舌をこすらせあう二人。

それだけでもマキナは満たされた様子で、眉尻を甘く垂れさげるのだが、

「くひあ……っ♡ あん♡ んんんっ♡ 睦月クンの……ニオイ」

ルシアをまたいだまま身体を起こしたので、ちょうどヒップがその顔の上に行った。

正座のような格好だ。かかどが食い込んで尻肉がムチッと左右に寄り、中央の美尻から、先ほど注ぎ込まれた白濁が染み出す。

睦月の虜になっている少年は、引き寄せられるよう上体を丸めて、ぬるぬるを舐めとりはじめた。

「っ、うっ、な、にを……あああっ♡」

いわば睦月の精液を舐めるための食器にされたマキナだが、この状況ではたまったものではなかった。

貫通されたばかりのアヌスは、睦月とルシアの濃密セックスを見せつけられ、じくじくと甘い疼きを帯びている。

「んっ、んん……っ」

ましてや睦月もキスをやめない。『入口』と『出口』が、同時に柔らかな舌でまさぐられ、マキナは背筋をびんとさせた。バストがふるふる跳ねる。

複雑な三角形を描く自分たちに苦笑しながら、睦月は腰ピストンのペースを速めた。

「ひんっ♡ んううう♡ あおっ、お、おしりい、焼けるうっ♡」

「っふ……うううっ、ああ。お尻、と、蕩ける……♡」

前立腺をコリコリ抉れば、ルシアは命令を破って射精しそうで、快楽と我慢に朦朧とした顔で喘ぐ。そして喜悅のお返しを、彼の体液でじっとり湿った女尻へと返すのだった。

「あっ♥ うっ♥ うううん……♥ も、もうだめえ♥ あなるっ、アナルすごすぎて、もうっ、もうボク、ボクうう♥♥♥」

「っ……、っうう……っ」

どちらも睦月に責められることで共通した少年少女は、ほぼ同時に音をあげた。寝そべった少年の肢体と、そんな彼をまたいだ女体が、同時にガクガクと痙攣を起こす。

ウエストの細さや肩の華奢さは同じくらいだが、バストが肉厚なぶんやはり少女の悶えのほうがダイナミックだった。反面快樂には少年のほうが正直で、小ぶりなお尻はこれまでよりさらに食欲にクネついている。

「いいよ二人とも……っ、はっ、僕も、僕も出すから。一緒にイクからっ」

「あは♪」

「♡……♡」

反応はちがっても、睦月が満たされるまで、快感を微妙に上滑りさせているのは同じなようだが。

「だ、出してえ♥ なかに出して♥ ボクのお尻、精液まみれにしてっ♥ 睦月くんだけのオナホールにして♥ どぶどぶ注いでえ♥♥♥」

深く上気した顔立ちをウツトリ蕩かして、柔肛から腸壁までをペニスに吸いつかせるルシア。

高ぶった彼の吐息を受けるのが幸せとばかり、無表情を崩して魔族ルシァそっくりの妖しげな表情を見せるマキナ。くつつけあった唇を離さないようにしながら、類たぐいまれな美体の曲線たぐいをくねり舞わせる。

舌を甘く噛まれながら、ペニスをぎちぎち食い締められる。睦月もまた上下で踊る二つの妖体に巻き込まれ、

「出る……っ、ク——！」

——どふう……っ！ ぶくる……ぶちやああ……っ！

今日五度目の、しかし食欲にウネる媚菊がお腹の中まで満足するくらい大量のマグマを放った。

「あ……ッ♥ あああ……ッ♥♥♥」

収縮した腸道が、熱い粘体でこじ開けられる。指オナニでは起こらない初めての感覚に、ルシアは目を丸くした。

ムッチリ膨れ上がった括約筋が茎肉に貼りついていて、膨大な量の睦月の分身は、あますことなく腹の奥へ向かう。

「んああああああおとおっ♥ ほああっ♥ ンっ、んくひいひいっ♥ なにこえっ♥
なにこれえっ♥ ふくっ、おっ♥ おおとおおっ♥♥♥」

腰の裏から身体が蕩けていくような快楽の質が、一斉にツーンと鋭い電流めいたものに



すりかわり、少年の細い四肢がゾクゾクツツと跳ねる。

「あああああああああああああツツツ♥♥♥♥♥♥♥♥!!」

——びゅりゅぶちやあああああつ！　びゅびゅつ、びゅるるるるうーうーうーっ！

出すときは一緒に。命令をようやく解禁されて、ひっきりなしに潮を吹いていたペニスがひときわ大きく膨らんだ。

愛しい人の真似をしたがるかのように、すさまじい勢いで白濁を噴火させる。あまりの射出力に小さな発射台が跳びはねるほどだった。それはルシア自身の腹部どころか、喉、あごまで届き、跨ったマキナの太ももまでふり散る。

「……っ、う……」

下半身から来る狂乱で手一杯のルシアが美尻から舌を抜いても、マキナはほとんど変化なく肢体を揺らし続けていた。

深酒したような目の下を真っ赤に腫らして、射精の喜悦でぐいぐい口付けを強める睦月に応える。そうして口付けの濃度だけで……、

「ふじたく……、う……あっ♡」

ビクン、ビクンと白い肉を揺らした。

ルシアの悶え方に比べれば、首にかかったりボンがふるつく程度の淑しとやかな絶頂ではあったが、

——びちやあ……ッ!

まるで刺激のなかった媚唇からは、内部を巡る歓喜の大きさを示すように、熱く濁ったエキスが吹き出す。

それは股まで飛んだルシアの体液にぶつかり、はじいて、やがて混ざり合っていた。

☆

☆

雨はいっそう激しくなり、台風が最盛期にかかろうとしていることを告げる。

中の三人がそれに気づく様子はなかった。雨が屋根を叩く音は、それぞれが立てる体内からの水音に消され。外の様子は、汗をはじめとする液体が気化した蒸気が窓を曇らせて見えていない。

なにより三人とも、それぞれにしか意識が向いていない。

「っはん♥ あはあん♥ ……睦月クン、睦月くうん……♥」
「……っふ、っふ……。……ん、ンン」

畳に足を伸ばした睦月に、二人がしなだれかかっていた。

左右から少年にしがみつき、すりすり甘い二人。ルシアは腰が抜けてしまったと全体重を預けてきて、抱っこベアーゼを求めてくるし。薄い忘我状態が続いているマキナは、

肩に頬ずりしてうっとり目を細めている。

どちらにも甘くキスしたり、髪を撫でたりしながら、睦月はつぶやく。

「二人とも、もう僕のものだ」

「うん。ボクはずーっと睦月クンのもの♡」

「所有者は……藤田君だけ」

「……ふふっ」

藤田睦月とは思えないほど高慢に笑いながら。

窓の外を稲光が走り、世界を揺らす嵐の音色にまじって、轟音が響いた。

「むふ……っ。むふううん……ッ」

マキナ用に進化した、マキナの遺伝子を虜にするための蜜が、またも吐きかけられる。

「んふ……♡ んっ、んっ」

どろどろ送られるそれを、少女は嬉しそうに鼻を鳴らしながら舌で転がし、やがて喉へと流し込んでいった。

乳頭快楽で火照った身体に、血管から来る浅い絶頂感まで加わる。細い腰がビクッ、ビクッと、喉の動きにあわせ定期的に跳ねた。

『美味いだろう』

「ふあ……い」

微妙に生臭さも帯びた蜜の味は、どんなアルコールより少女を酔わせた。

彼女のために精製され、醸造された魔の淫体液。人間の理性に抗う術がないのは当然のことだった。

『すっかりオレの虜だなマキナ。だがオレが欲しいのはいまのお前のような、淫らなだけの雌豚ではない。すぐにオレ用の苗床に作り変えてくれよう』

じゅぼりと卑猥な音を立てて、口腔を犯していたものが離れる。

魔薬注入が中断したことで、ぼーっと淫靡に潤んだ少女の瞳が、わずかに理性の輝きを取り戻す。

触手は汁を滴らせながら、枝分かれした尖端をまたひとつにし、蛸足の形状になった。そしてすると、あえて避けていたであろう少女の下腹部を狙う。

「ひん……っ！」

両手両足を縛られたまま直立姿勢を取っていた肢体が、大きく持ちあげられた。スライムに支えられたまま宙に浮き上がり、足をM字にした前屈姿勢で固定される。イソギンチャクに噛まれたままの乳房がたふんと重たそうに垂れた。

開脚で格別股関節へと食い込むようになったフィットスーツ。樹脂と布地の中間のような、微妙なざらつきと反発を蓄えた素材越しに、大量の吸盤が股間に吸いつく。

「や、やめて……さわら、ないで」

これまでなかった場所への刺激に、か細く嫌悪の声をこぼす少女。

「なにを言っている。服越しにもこんなに熱くなっておるではないか」

悔しいことに、はしたない部分がおもらししたよう蜜を放っているのは、マキナが誰よりよく分かっている。先ほどから撫でこすられる内腿から、膝やふくらはぎにいたるまで、温かい水気が滴っているのだから。

ウネウネと特有の卑猥なウエーブで、スーツに浮いた逆向き『m』型の恥丘ラインを押し揉んでくる唇肉。

「触っただけでクチュクチュと卑猥な音がするしなあ。防水加工はよいが、疼ききった濡

れっぷりはちつとも隠せておらんぞ、雌豚め』

「うっ、うああ、い、や……」

優しい睦月が相手では、焦らされた経験などほとんどないマキナだけに、疼ききつた秘肉をいたぶられる効果は絶大だった。

肉が押されるたび、触手がひと波うねるたび、寒気がするほど切ない悦びが、じとつと膣道内に染みる。

『いや、か。ククク、もう正気に戻ったとは。愛らしいやつよ、ますます気に入った』

魔物は撫でこする触手を裏返して、さらなる淫辱に及んだ。

コネられたことでスーツの奥の淫弁は口を開いてしまっている。盛り上がった肉が作るひし形が、高性能にフィットする素材には残酷なほどクッキリ浮かんでいた。

そこに蛸足の裏側——吸盤を使って、またウェーブを送ってきたのだ。

「はああああア……っ、あっ、あっ、……くっくっ♡」

たちまちマキナは先ほどから連続している浅いアクメに飲み込まれる。

摩擦の感触にでこぼこが加わっただけではない。細かい吸盤がぺとぺとと、肉唇の中身、熟れ蕩けた園にくっつく。

吸いついては剥がれ、剥がれては吸いつくイボ。これまで味わったことのない、無数のクンニ口で秘苑全体が甘く啄つばまれていような触感に、マキナはたまらず嗚咽のトーンを

吊りあげる。

ジンジンとひし形にめくれた……表面だけが熱くなる。

「つく……、う、うむ……うう」

『ククク、どうだ、たまらんだろう。そして足りないだろう。オレの汁を吸った以上、お前の雌豚子宮は孕まされたくてたまらんに、入り口だけではなあ』

「~~~~~……ッ」

歯を食いしばり、下腹部をゾクゾク泣かせる切なさに抗うマキナ。

確かに味わったことのない種の淫楽には、絶妙なもどかしさが隠れていた。

あくまで表面だけなのだ。ジンジンと疼く子宮、そこへいたる道への刺激が弱かった。先ほどまでの押すようなウェーブ弄りなら衝撃もあつたのだが、吸盤攻めだけでは、どうしても触覚が浅い。

『欲しそうだなマキナ。さつきから膣がくぱくぱ自分から広がっているぞ』

発情しきつた淫弁が、奥の穴までくつろげるほど左右に広がっている。指摘されるまでもなく自覚し、少女は情けなさに眉をゆがめる。

ころよしと見た魔物は、蛸足触手の狙う先を、右太ももに切りかえた。

『……さあ、選ぶがいいマキナ』

耐水性能付きのフィットスーツは、胸元や肩が開いているため上半身は防御できなかつ

だが、下半身までは侵入を許していない。

ただ腿のところには着脱用の継ぎ目がついていた。防水加工されて内側につまみのついたファスナーなので、外から勝手に忍び込まれることはないが……。

『これを外せ。さすればお前の疼いた箇所にも、一番欲しいものをくれてやる』

「え……」

その継ぎ目の上を、吸盤肉手が這いずりだす。

ここを外す——このスーツでもっとも秘唇に近い場所を無防備にする。それはそのままこの魔物を受け入れることを意味する。

「い、いや。欲しく……ない」

首を横にふる少女。しかし、

『嘘をつけ』

「くくあつ！」

秘唇以外を責める触手は相変わらず活発で、ぎゅるりと全身に巻きついたものが細い肢体をよりキツく絞り上げた。

乳房は根元から白い肌が見えないほどミチミチつぶさされている。乳頭にはイソギンチャクが吸いつき、乳首を貫いたままなので、乳腺に振動が伝わり電流のような喜びが鋭く背筋を走った。

たまらずガクンと揺らした腰部では、スライムの水分がまぶされヌメるお尻にも、肉手が向けられる。五股に分かれてヒトデのような、手のひらのような形状に変化すると、ぎゅつと肉たぶを左右で絞り掴まれた。

先ほど睦月に慣らされた肛門が勝手に反応して、キュンと甘痒さが走る。すると魔物は目ざとくそれを感じとり、フィット素材に括約筋のリングが浮かぶくらい粘着質に吸いついた。

そして口元には――。

「んっ、んう……ああぶっ」

べちゃりとまたちがう触手から、ヨーグルト状の体液を吹きかけられた。

口を閉じてかわすマキナだが、どろどろの顔面パックの生臭さは、脳髄を蕩かすほど官能的に香る。

「あぶ……、は、んむ」

なにを命じられたわけでもないのに、調教された舌が、ピンク色の唇を伝うエキスを舐めとっていた。

ひと舐めすると止まらなくなる。小さな舌をしきりに上下左右させて顔を覆うものを舐り、にゆるつとキスしてくる触手は、自分から口に含んでぺろぺろと愛撫を返した。
(だ、だめ。いけない。このままでは……)

帯をこすりあげてきた。

俗にGスポットと呼ばれるそこは、少女の一番の弱点だった。相性抜群な睦月のペニスを迎えると雁首がみっちりハマって、セックスのたびに敏感にさせられてしまう。

そんな箇所に吸盤を食い込ませられ、つぶつぶと啄みの連打を降らされるのだからたまらない。少女は熱に浮かされたような虚ろな目で、「あっ♡ あっ♡」と喜悅の嗚咽をこぼしてしまふ。

細い切っ先がとうとう最奥にあたった。

『もう身体は受胎準備をはじめているようだ。子宮がずいぶんと降りてきているぞ。子宮口もユルんでいる』

マキナの淫らな反応を、当然のこととばかり自信満々に見つめながら、魔物はなおも侵攻を進めた。

コリコリしたドーナツ型の中央部へ向け、先端をイソギンチャク状に変える。

——ぬるうううう……っ。

「うん……っ、んああああああっ」

ミルク穴にも入った極細の肉繊維は、たやすくそちらの穴にも侵入してきた。

子宮侵入——淫魔生物からすれば当然のセックスなのかもしれないが、人間が味わう種の感覚ではない。腹の中すべてを犯された気分、少女もたまらず悲鳴をあげた。

だがあちらは容赦しない。キュウキュウと吸着してくる肉層に、また特有の淫猥なウェーブを送りながら、赤ん坊のための地帯を撫でこすっていく。

「くっ、ひんっ、んんっ。……こ、これ、あああ♡」

切ないような戸惑いをあらわに、マキナは初めて味わう快感に震えた。

子宮の内側に触られていると、まるで自分という存在すべてがこの触手に囚われてしまった気分になる。

屈服……隷従……抗いがたいものが間断なくこみ上げてきて……。

『ククッ、やはり雌は子宮を手懐けるに限る』

「んっ、ああ……。はああ……」

子宮姦の威力はすさまじく、こねくり回される膣肉が、急激に従順になっていった。きゆうきゆうと愛しそうに触手に吸いついて、ねっとり熱い蜜を吹きかける。

『ほれほれ、じき排卵がはじまるぞ。もうお前はオレのことを、孕ませてくれる主人と認めているからな』

つるつるした赤ちゃんの園の内壁を、細い触手が挑発するようなぞる。

「くっ、くっくううう」

膣を弄られて神経を伝う快楽とはちがう。魂を舐めしゃぶられるような、抗いような陶酔だった。

反応は他にも及んでおり、美しい鼻先からはひどく甘美な吐息が漏れるようになる。

『ここにとどめの汁をくれてやれば、オレの苗床となることしか、オレの子を孕むことしか考えられぬメスになろう』

「え……？ あ、い、いや」

孕む——その言葉に、少女は口と身体で真逆の答えを返す。

口では拒んだ。魔物の温床にされるなど御免だし、この身体、そんなことに使われるわけにはいかない。

だが身体は、子宮と膣道は、どうぞ孕ませてくださいとばかり啜え込んだ触手に媚びるような収縮を返してしまう。

『遠慮するな。お前のココはこんなにも欲しがっているぞ』

「いや……っ。うああっ、あ、あ、中を揺らさないで」

『言ってみろ。オレの体液が欲しいと。真の意味でオレの奴隷となり、オレの子を孕み続けるメスになりたいと』

べつとりGスポットに貼りついた吸盤を支点に、触手全体がウエーブを起こす。

彼女自身の反応のせいで、狭くなった膣肉はより激しくもみくちゃにされた。

ジクジクと股関節の周り全体が蕩けそうで、背筋がのけぞる。イソギンチャク触手を生やした乳房が跳ねた。

(だ、だめ。だめよ。ああ……)

悔しいことに子宮から起こる隷従心に囚われたいま、魔物の言葉はすべてが胸の奥底まで刺さる。

この魔物の子を孕むことが、悪くないと思えばじめていた。そしてそんな異状をふりばらうだけの理性はいま、濃厚な膣攻め快楽に蕩かされている。

先ほどファスナーを開けてしまったよりもっと大きな選択——。拒みたいのに、先ほどをはるかに凌ぐ愉悦と屈服に囚われていては。

「……う……、う……」

『どうだ？ ん？』

ほじくられる乳首。舐めまわされる肛肉。魔液に浸される口腔。

そしてなにより、いま受け入れんとする子宮肉が少女を操ってしまう。

「……」

触手に貫かれたままの腰が、ぐっと大きくそり返った。上半身が前にかがみ、四つんばいに近い格好になる。

——動物が原始的な本能で取る、性交のためのポーズ。

「欲し……い」

か細い涙声……だが確かに、少女自身の口からその言葉が漏れた。



ッ、ブルッと揺らすだけだった。

淫気にあてられた天使らのぼーっと見守る中、少女はそのまま、ずるずると巨大な黒肉の中へと飲み込まれていった。

意を決して、こちらも最後に残ったパンティをくるくる丸めて脱いでいった。
「……セックスする」

☆

☆

「いい、いい？ これは封印のために必要なことであって、別にアンタのこと好きになっ
とか、そんなんじゃないんだからねっ」

「分かってるよ」

お互い下着を脱ぎあつて全裸になった。

横向きに寝そべりなおして、一度は手放した抱き枕にまたぎゅーつと顔をうずめている
彼女。

半裸は以前見たことがあるが、（記憶にある限り）大事なところまですべて見るのは初
めてだ。悪趣味とは思いつつもよく見せてもらった。

綺麗な赤毛を期待した秘毛は、まだ産毛すら生えておらず色は分からない。腿の付け根
から中枢部にかけて、ツルンとした幼いヴァギナだった。ココを見せてもらった女性は三
人いるが、一番子供だったマキナよりもっと幼い。

マキナのそれでも相当に窮屈なのに、こんなところに入るのかと不安になった。

ただよく見れば、たっぷり柔らかくして口を広げたクレバスの奥部は、充血の赤みが強い、いかにも柔らかかそうな色合いをしていた。

これなら何とか……。けれど痛がらせるようでは……。逡巡する少年。その間ずっと、ジーンと恥ずかしいところを凝視しているのだが、

「……っ、……」

エンジュから文句が出ることはなかった。

彼女のほうも、枕の隙間からちらちらと睦月のソレを見ている。へそにつきそうなほど高々と鎌首を持ちあげ、キノコのように広範囲のエラを張った形状を。

目はぼーっと潤み、時おりぬいぐるみ枕に埋まったまま湿った吐息をついた。

その形状は少女にとって、いくつもの淫靡な記憶に直結しているのだ。

最初は伊部草マキナの処女を奪わせたとき。傍^{はた}から見えていたエンジュはいつの間にか淫気にあてられ、自分から嬉々としてあのキノコ型に舌を這わせてしまった。

次にシュバルツに襲われたとき。括約筋から直腸へと、硬さ、熱さ、形状のすべてを覚えこまされた。いまでも肛門がじくじく疼くくらい鮮明に思い出せるほど。

そしてこれまでの数日間。口で、肛門で覚えたアレの味を、何度も反芻^{はんすう}してしまった。ちようどこのベッドの上で。一人恥ずかしいところを弄りながら。

「……はう」

今日はとうとう一番大切な場所に形状を植えつけられる。そうしたら自分はとうとうどうなってしまうのだろう。甘美な恐怖心に、ゾクゾクと胸が震えた。

「行くよ」

自分がリードしなければという使命感から覚悟を決め、睦月が腕立てふせの格好で少女に忍び寄る。

正面から顔を見合うのは恥ずかしい。といって後ろからというのは怖い。側臥位そくがという珍しい、ある意味でエンジュらしい格好での結合となった。

横向きに寝転んで体育座りでもするよう膝を抱えている彼女の、上の足を抱える。

「う……っ」

強制的に広げられる股間を、涼しい空気と、少年の発する熱気の二層が触る。

深呼吸しながら横を向いた肢体に覆いかぶさる睦月。あくまで彼女への気配りは欠かさないのであるが、取り出した勃起は凶器じみた膨らみ方をしている。秘口を探りあてれば、いよいよ来た不安の瞬間に少女が眉をたわめた。

「っ——入るよ」

「うん……。っ、あああう」

自らのもので女体へ攻め込む——この瞬間だけは抑えきれない至福の興奮に息を荒らげる少年と。逆にどうしようもなく弱々しい声をあげる少女。

たつぷり揉まれた肉蓋はほぐれているものの、その奥で粘膜は初々しく引き締まっていた。赤く火照った粘膜は潤滑油じゅんかつゆたつぷりにヌルついていても、まだ杭肉は入りづらい。

「ああああっ」

「うあキツ……。大丈夫エンジュ？ 痛い？」

噛まれた亀頭が痛いほどの狭さに、少年は腰を止めた。

膣道はただ幼いというだけでなく、入り口だけでも処女のそれだと分かるほど閉じきっている。このままでは繊細な肉を傷つけてしまうのではと不安になる。

ただ少女は、抱き枕に破れそうなほど爪を立てながら、

「い、いいから。さっさと……来なさいよっ」

シートでこされる横顔を真つ赤にして言う。

「伊部草は簡単にやってたじゃない。あたしだって……」

「え、あ……うん」

なぜここでマキナの名前が出てくるのか。よく分からないと首をかしげる睦月。

ただいいところでもいい名前を聞いた。マキナのことを、ひいては数時間前に、彼女やルシアとしたことを思い出した。

二連続で奪ったアナルバージョン。前と後ろでちがいはあれ、狭い穴を制圧したことは一緒だ。

あのとぎのやり方を思い出して……。

——ぬこ、ぬこ、にゆこにゆこにゆくにゆく。

「あつ、うつ、つ、ううう……っ」

焦らず、引かず、ギユッと閉じた道の入り口へ、ペニスの熱さを覚えこませるように粘膜同士をこすり合わせた。

エンジュの声はまだ痛みに関するものが多いが、秘苑にはどんどん潤みが増してくる。

狭い場所をくつろげる方法には慣れていない睦月だが、これだけ感度抜群の粘膜がきめ細かくひしめく道なら。さほど苦勞はしなかった。

ヒダヒダは最初のうち戸惑っていたものの、すぐに熱いオスの感触を覚えて力が抜ける。収縮が弱まれば、潤滑油は充分なので、結合はひとりでに深まっていった。

ゆっくりと、ゆっくりと、二人の下半身が慎重に寄り合っていく。

「んは……うああ、エンジュのなか、くっついてくる」

ひとつ問題なのは、包まれた先から亀頭に這い寄る心地よさに、怒張がいつそう膨らんでしまうことか。

エンジュの胎道はミカやマキナ、シュバルツのどれともちがう、また新しい官能の園だった。

肉のリングを連ねたような、ヒダの層でペニスを転がすミカやマキナのもの。厚めの

粘膜に細かい粒が群をなして攻撃的に引つかいてくるシユバルツのもの。ちょうどその中間だろうか。

粘膜に不規則なおうとつがあり、それらが入り込んだ先からペニスを舐めてくる。たとえば何人もの幼女が小さな舌を尖らせて、一斉にペニスをくすぐってくる感じ。

(女の子って一人一人ちがうんだ)

男性器に個人差があるように、女性もそれぞれ個性的だ。妙なところに感心しながら睦月は、抱えた彼女の足を肩に乗せて、いよいよ挿入を深める。

「う……くううっ、うううっ」

身体のほうは少年の巧みな腰使いで、膣肉が隅々までこすられるような雁太相手でも大人しく射抜かれているが。初めて体内に他人を迎える少女は、その未知の感覚に歯を食いしばって耐えていた。

——びび……っ、ぴち……っ。

「っ、っうう……」

ヴァギナの名器っぷりに酔いしれている少年は気づかなかつたが、野太い雁の円形が、未踏の聖域を守る薄膜を千切りとつていく。

わずかな痛みと、自分が大人になった手ごたえ。少女は切なげにため息をついた。細い裸身のすべてに脂汗が浮き、散らばった赤髪が貼りつく。

少年はそんな乱れ髪に指をさしいれて、蜂蜜のような指通りのなめらかさを楽しみつつ、美しい相貌そうぼうを覗き込んだ。

「エンジュ、まだ痛い？」

処女膜を踏破したことには気づかなかったが、彼女の切なそうな表情には気づく。

見下ろせば大きく開脚した細い太ももの付け根、びよこんと膨れたクリトリスの根元には、雄々しい砲身がもう半分以上上めり込んでいる。

気づかう睦月に、エンジュは、

「……むつき」

初めての。一生忘れられない相手になった少年を仰ぎ見た。

深いブルーの瞳に、様々な感情が浮かんでは消える。

なにを思っているのか睦月には分からなかった。どんな男にもこの瞬間の女心だけは分からない。

分かったのは、

「……う〜」

エンジュは結局エンジュということだけ。

「痛いわよっ」

また気難しい唸りをあげた少女が、いつものごとく眉を吊りあげて怒った。



「つうう……、い、伊部草、なんでこんなの最初ッから気持ちよさそうにできたのよ。うああ、声だすと、響く」

いつもの通り、キャンキャンわめく子犬のように文句を言う。

ということは少なくとも、いつもの彼女でいられる余裕はあるわけで。身体が裂けそうとか、どうしようもないといったレベルの痛みではないらしい。

それに……。

「でもココは力が抜けてきてるよ」

「はあ……っ？　ば、ばかなこと……」

——にゆくにゆかずむずむずむずむずむ。

「あつ、あんつ、やんん……っ、うあつ」

押し込む際の穴をくつろげる前後運動を、少し幅を大きく、ヴァギナ全体を刺激するよ
うな動きに変えてみた。

すると出入りする極太にはぬらぬらしたエキスがこびりつく。

少女の催す潤滑油が、ペニスに馴染みだした証拠だった。

二人の性器が馴染んできている証拠。

「もうちょっとで気持ちよくなりそうだね」

休みなく下半身をこすりつけながら、身体を折り曲げて顔の距離を寄せた。

と、少女は、先ほどよりいくぶん優しい抱き方になった枕に顔を押しつけ、

「い、痛いだけよ」

恥ずかしそうに言う。

笑ってしまふ睦月。なぜなら、二ヶ月一緒に暮らした経験からいって、こういうときの彼女は……。

「よっ、と」

——にゆるにゆるずぶずぶ。

「んはっ、こ、こらっ。急にそん……あああはあん」

少し激しめな。ミカたちとするときにするような突きを送ってみる。

エンジュの口から飛び出したのは、先ほどキスのあいだ口の中へ吹き込んでいたよ
うな、鼻にかかった声だった。

二ヶ月暮らした経験から、彼女がウソをつくときの顔はすぐ分かる。

「ひよっとしてエンジュ、もう感じてる？」

「なう……っ、そ、そんなわけ。痛いだけよ」

詰まり詰まりになりながらも、キツと眉を吊りあげる少女。

だが膨れた雁首がヴァギナをなぞると、その瞳には、前戯で見せた甘えたがる色が走るのを隠せなかった。

秘毛がないので丸見えのクリトリスも、尖ってぴんぴん跳ねている。内部からくる熱い奔流に耐えられないように。

(痛い、好きなのかな)

痛がつているのは間違いないだろう。エンジュの中身はまだペニスに慣れてくれず、戸惑った伸縮しか返してくれない。

だがそんな未成熟な粘膜でも、優しくこすつてあげると、

「あうあつ、はあんっ。こおら、だから、そんな急に……やあああああん」

苛烈な衝撃にも、少女の口からあふれる声は痛がつていない。

やっぱり感じてる。確信を得て、ゾクゾクツと胸を震わせる睦月。

(エンジュ、もしかしてすごいエッチな子なんじゃ)

マキナやシュバルツ。それこそミカでさえなかった反応だ。

受ける感覚を、快感と思う幅が人よりはるかに広いらしい。そういえば先ほどもキスという弱い刺激だけで全身から力が抜けていた。

他人の接触を拒みたがる凜々しい天使——。

いざ接触されたら、ものすごく弱々しい本性が見えてきた。

「♪」

楽しくなつてしまい、腰に強く体重を乗せる。

小柄なエンジュは内部構造も子供で、根元まであと少し残したところで亀頭がコリコリした反発に突き当たった。

「あれ、もう終点だ。エンジュ、どう？」

ぬたぬたとたどり着いた子宮口へ先端をこすりつける睦月。

「っはぁ、ふはぁ……。お、おなか、いっぱい」

締めりのいい膣肉を連続してペニスにぶつけながら、少女はいつものツンとした美貌を妖しく蕩かしていた。

子宮をユサユサ揺さぶられる感覚に恍惚としている。

「……ふふっ、エンジュ、エッチな話とか嫌いだけど、されるのは好きだったんだ」

温かな果汁が、ぴっちり巻きついたペニスにまぶし込まれるのを感じる。つついっ笑ってしまふ睦月。

蛇眼といういかかわしい能力を無条件で嫌悪したり、睦月とミカのただれた関係を怒ったり。シモネタ大嫌いな彼女が、人一倍官能性豊かなのだから、楽しくなるのは仕方ない。「なっ、なに言ってるのよ！　こんなの好きなわけ——」

プライドの高いエンジュはやはり怒るが、

枕と肌のあいだに手を入れる。

——ふにふに、くりくり。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

仙獄学園戦姫

ノブナガツ! comic



信長が、秀吉が、義元が、エツチにバトルにと漫画で大活躍！
もうひとつの『仙獄学園戦姫ノブナガツ!』がここにある!!

待たせたら

毎月中旬
発売!!

18歳未満の方は
購入できません

18

漫画：老眼
原作：斐之嘉和
キャラクター原案：SAIPACO

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス
『闘神艶戯』偶数号にて連載中!

編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で
好評
発売中

男の子と女の子——
二つの性の間で揺れ動く
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

オトミコ! 僕は男の巫女娘

【小説・大熊狸喜 / 挿絵・大空樹】

目覚めると
従姉妹を護る
美少女剣士になっていた
【挿絵・天鬼とろり】

【小説・狩野景 / 挿絵・天鬼とろり】



全国書店で
好評
発売中

**凄腕退魔士の咲妃を
牝奴隷に墮とす
新たな敵の登場!**

呪詛喰らい師2

【小説・蒼井村正 / 挿絵・或十せねか】



全国書店で
好評
発売中

**平凡な少年が女体化!
鬼に狙われた従姉妹を護れ!!**

既刊LINEUP ● 仙遊字盤戦姫 / ノナガリ ①～③
● ビルグリムメイデン ①～③
● 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです

● 思春期なアダム ①～④
● 呪詛喰らい師【カースイーター】
● 女幹部メル様のカイ役(仮)設計画!
● 借金お嬢クリス ①～④
● 無敵の姫騎士がPMに目覚めたようです
● 宇宙海賊学園ブラックキャット

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。



思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田睦月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった! ごく普通の少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する!

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
好評
発売中

思春期なアダム2 背後をねらう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、睦月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たなる刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱! “蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、睦月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
好評
発売中



思春期なアダム3

一人泣きの子猫

蛇眼の力を持つ睦月をそれぞれの思惑で見守る、天使少女に悪魔少年&秘密組織の美少女たち。そこに睦月の命を狙う刺客——黒猫が再び襲いかかる…も、睦月は球技大会のバレーボール特訓や、蛇眼の力を抑えるためのエッチに大忙し!? 果たして彼の力を手に入れるのは誰だ!?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
好評
発売中

呪詛喰らい師

カースイーター

人の強い想いを糧とする半妖神——淫神。常盤城咲妃は、呪印術と「ウズメ流神伽の戯」を駆使し、時にはその豊富な身体を差し出して彼らを鎮めていた。そんな彼女が派遣された街では淫神事件が次々と起き始めて……!? 迫りくる魔の手から友を守るため、咲妃は淫らな戦いに身を投じる!!

小説●蒼井村正
挿絵●或十せねか



全国書店で
好評
発売中

あとみっく文庫
思春期なアダム4
聖域の崩壊
【電子書籍版】

著 者

さかき傘

装 丁

キルタイムコミュニケーション制作部

発 行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコビル1F

●編集部 TEL.03-3551-6147 / FAX.03-3551-6146

●販売部 TEL.03-3555-3431 / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Sakakikasa 2010-2011

当ファイルは、あとみっく文庫「思春期なアダム4 聖域の崩壊」
(2010年12月6日 初版発行)に基づいて作成しております。

<http://ktcom.jp/>